
異世界喫茶物語

時雨 茉莉音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界喫茶物語

【Nコード】

N9796L

【作者名】

時雨 茉莉音

【あらすじ】

迷宮都市、そう呼ばれる都市に突然来る事となった主人公。

チートな存在な喫茶店の店主に助けられて喫茶店の店長代理として今日も彼は一日を過ごす。

家事全般チート主人公と戦闘関係チートな店主、時折やってくる迷惑な客に苦笑を浮かべて迷惑そうにそれでいて楽しそうに毎日を過ごすのんびりファンタジーな物語。

第1話 喫茶―蒼翠―（sou sui）開店します。（前書き）

初めての投稿です。

勉強不足な所も多々ありますが指摘等ございましたらお手柔らかに
お願いいたします。

ほぼ思いつきなのでプロットは全く組まずに思いつくままに書いて
ます。

その為に途中で更新も滞ると思われるので申し訳ありませんが過
度な期待はしないでください。

第1話 喫茶―蒼翠―（sou sui）開店します。

異世界喫茶物語

迷宮都市。

ここは神代の時代に建てられたという謎の多い迷宮を探索するために作られた都市である。

その迷宮の中には神代の武器、文献、宝物等、歴史的に大変貴重なものが埋まっており、それを守るかの様に迷宮内ではモンスターが蔓延っている。

それらを退治しながら迷宮に潜り、探索をする者たちがいた。

人は彼らを冒険者と呼び、彼らの活躍に憧れ、それと同時に圧倒的な力を持つ彼らを恐れた。

ここはそんな世界で、僕は今日も店の扉の札を切り替える。

―喫茶…蒼翠―sou sui―開店します。

カランとドアベルがなり、今日一番目の客に僕は磨いていたグラスを脇に置く。

やって来たのはここの常連で少し頭の弱い冒険者である、ちなみに美人。

「いらっしやいませ…と、キュリエルさんじゃないですか…久しぶりですね。」

「やっほー、元気にしてた？ ゆーくんは相変わらず硬いわね。」

天真爛漫、そんな言葉が似合いそうな彼女に苦笑しつつ、目の前のカウンター席を陣取ってニコニコと笑っている彼女にアイスティーを淹れる。

ありがと。と礼を言う彼女に笑みで返し、最近起こった事や世界情勢など、世間話をしつつ彼女の頭に付いているピコピコと動く猫耳を眺めていた。

僕がこの都市に来たのはほんの5年前のことだ。

元の世界でトラックに撥ねられて気が付けばこの世界の迷宮の32階層目に寝転がっていた。

偶然通りかかった冒険者であり自分の命の恩人である銀子さんに拾ってもらわなければ今頃はモンスターの栄養となっていたことだろう。

銀子さんの話では食べられる寸前だったとか。

僕がなぜこんな場所にいるか聞かれたときは困った。

正直に話して信じてもらえる内容でもないし、迷宮から出て外の風景を見てなんとなく「ああ：もう帰れないんだな」と不思議と納得してしまった自分にも愕然とした。

ならばと銀子さんは僕にいろいろな事を教えてくれた。

この世界で生きていく以上の最低限の常識と知識、自衛の為の護身術まで教えてくれたことには感謝はしている、厳しかったけど。

この店喫茶・蒼翠も銀子さんの所有する店である。

彼女に少しでも恩を返すために僕はこの店でマスターとして働いているのだ。

「あ、もうこんな時間だ。」

キュリエルさんは店の掛け時計をちらりと一瞥して慌てた様に立ち上がる。

時刻は昼前を指していて彼女の所属するパーティーの行動を考える
とこれから迷宮に潜るのだろう。

「ごちそうさま。それじゃあまた来るね？」

バイバイと手を振りながら駆けていったキュリエルさんを見送り、
僕は彼女が飲んでいたグラスを下げる。

今日も平和に過ごせますようにと益も無い事を考えながら。

しかしそれは叶う事無く、来客を告げるドアベルが鳴ると銀髪を腰
まで伸ばした紅眼の女性が現れた。

「あゝ…疲れたあ…」

ドカッ、とカウンターに大きく膨らんだ麻袋を放り投げると女性は
カウンターの中にあるグラスを勝手に持ち、棚に置いてあるワイン
を適当に見繕うと手酌でグラスを煽ってしまう。

見てくれは世の男性の殆どが振り向くであろう美貌に出るトコは出
て引っ込むトコは引っ込んでいる彼女、勝手に店の、しかも昼間か
ら酒を飲んでいるその姿からは想像も出来ないが街のギルドの上位
ランク持ちであるらしく、しかもこの店の本当の店長^{マスター}である。

普段はこんな事はせずに真っ先に自室に飛び込んで迷宮で狩ったモンスター素材で何かを造る筈の彼女なのだが偶に一緒に潜った冒険者とそりが合わなかったり、何も収穫が無かった時等はこうして店のお酒で自棄酒をする。

「銀子さん、またですか？」

そんな銀子さんの行動に溜め息を吐きながら摘みを差し出す僕の中には先程から銀子さんが浴びるように飲んでいるお酒の値段を見て大体のことを理解した。

あまり高くないお酒を飲んでいるからには恐らく同行者の行動が気に食わなかったか或いはその同行者が非道い失態を犯したかだ。と睨んで見る。

前回の荒れ様を見ての経験眼から見てみたが強ち間違ってもいないらしく銀子さんはうーとか唸りながらグビグビとグラスを煽る。

幸い昼のピークも過ぎたからか客足は途絶えていたが昼は喫茶店、夜は酒場としている店の店長が昼から飲んだくれていては世間体というものがあるので勘弁してもらいたい。

若干朱の差した頬で此方を見上げる銀子さんに胸はときめいたりするのだが先程の？んだくれている彼女を思い出すと僅かではあるがその熱も冷める。

「聞いてよゆー君ー：あいつ新参者の癖に『俺達のパーティーに女はいらない！』とか言い出すのよおっ！！」

思わず握り締めたであろうグラスがギシリと危険な音を発する。

：テーブルに叩き付けて割る程まではいかないが相当怒っているらしくグチグチと言える限りの文句を呟きながら摘みをぽりぽり摘む彼女に適当な相槌を打って僕は小さく溜め息を吐く。

さっさと一日が終わればいいのにと祈りながら。

第1話 喫茶―蒼翠―（sou sui）開店します。（後書き）

拙い文でございましたがどうでしたでしょうか？
楽しめていただけたら幸いです。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第2話 お金の価値（前書き）

今回はお金の価値について。

計算が面d：げふんげふんので日本円にしました。

まあ、色々ありえないかと思いますが其処はご容赦を。

第2話 お金の価値

この世界に来て吃驚したのがお金の価値だ。

普通こういう異世界物の小説だと金貨とが銀貨とか銅貨とかでちよつと分かりにくかったりするものだがなんとここでのお金の値は円と呼ぶらしい。

銀子さんのKYOUIKUの中にはこの世界の情勢、地理、歴史、一般常識等多岐に渡り、更には魔法知識、護身術と称した”何か”と安くて質のいい卸店や近くのおいしい食堂など必要なものから必要でないものまで教えてもらっている。

勿論その中にお金の価値というものがあって聞いてみると日本と変わらない呼び方で呼称されているではないか！

計算しやすく助かっているが何か釈然としない物を感じつつ僕は銀子さんから様々な事を教えてもらった。

なぜここでお金の価値が出てくるかって？

うん、それはね…。

「てんちよくっ！お願い！！お金無いからツケといって！！」

冒険者になると財政難からかこういう客も出てくるのだ。

勿論、こういう客は極少数であり、普段からキッチンと計画を立てて迷宮に潜って無駄遣いをしなければこういう事にはならない。

「…アーベ、君は先月も同じ事を言ってそのツケを払っていないじゃないか。」

溜め息を吐きながら無駄遣い冒険者の一人である目の前の青年を睨み付ける。

彼の無計画さは磨きがかかっており、よく組んでいるパーティーのリーダーの話では『奴に財布を握らせると碌な事が無い』と言わしめる程。

本人は褒められたーと喜んでいるがパーティーメンバーの揃って出た溜め息に思わずエール（この世界のビールみたいなもの）を一杯奢った程だ。

そんな彼が笑顔で来月には払うと言っているが信用できるか？いや、出来ない。

しかし難儀な事にもう調理した食事を食べた後でそれを見計らっていうあたりまだ好感は持てる。

食い逃げするような奴なら容赦なく『OHANASI』をしたんだが…

ふう、と溜め息を吐いて手を差し出す。

アーベは笑みを浮かべて手を握る。

ふざけんな。

「誰が握手すると言った！ さっさと耳揃えて金出さんかい！！」

「だからお金ないって…」

やかましい！ そう心で毒吐きながらあからさまに溜め息を吐いて妥協案を出す。

「無いなら物でもいいって銀子さんが言ってただろうに…。」

「おお！ そういやあそうだな！！」

かっかっかつ、と笑いながら腰のポーチからナイフを取り出すアーベ。

それを受け取り鞘から刀身を抜き出して判る範囲で検分する。

特に汚れらしい汚れも無く割りと丁寧に扱っている事が伺える。

まあ、自分の命を預ける獲物だ、大事にしない奴が居ない…とも言いきれないが状態の良いナイフに普段のアーベの怠けているイメージからかけ離れた整備のされたナイフを見て十分と判断した僕は先月分もこのナイフでチャラにすることにした。

「…これだけの状態なら先月分もチャラにしてあげるよ。」

「お！そりや助かる！！」

相場から考えてもナイフは安物の新品で大体2万程の値段である。

中古品だとしても1万〜1万五千円程の値段であり、新品だとしても先月と今月のツケをギリギリ払えるか少し少ないくらいのツケが溜まっている訳ではあるがまあ、そこは友情価格とか憐れんだ結果と言うか…。

少し意外な友人の一面を見た僕は少し上機嫌で彼にドリンクを一杯サービスする事にした。

アーベと世間話をしながら最近の話題を取り込み、幾つか目新しい情報を買付けながらグラスを磨いていた。

既に昼のピークは過ぎ去って店内には数えるほどの人数しか居らず、それも常連ばかりで外の喧騒とはかけ離れた静かな店内にコーヒーの香りと周りの客に配慮した僕達の話し声が店内に響く。

意外と大声で騒ぐイメージのあるアーベであるがこいつは意外と周りに配慮する心遣いを持っていて意外と礼儀も正しい。

黙っていれば眼を引く赤毛の碧眼の美男子ではあるのだが普段の金遣いの荒さに振られること数十回。

その度にウチにやってきては自棄酒を煽りそしてツケを貯めて行く

と。

まあ、まだ本人は若いんだしそんなに早く身を固めなくても、と何気なく言った事もあったがアーベは苦笑を浮かべて色々あるのさ。と格好良くグラスを煽った姿に嫉妬した。イケメンは滅べ。

まあ、兎に角冒険者なんて危ない職業をしているぐらいだ、僕がとやかく言う事は無いと自己完結してふと鳴ったドアベルに反射的に「いらっしやい。」と声を掛けた。

来客は店内を一瞥し、一人納得したように頷くとカウンターに座って言い放つ。

「店主よ、ここに来れば『紅眼の銀狐』に会えると聞いたが？」

黒いゴスロリを着た金髪ツインテールロリの言葉に顔を顰める。笑いを堪える意味で。

『紅眼の銀狐』：銀子さんの二つ名である。

そんな二つ名を聞いて大笑いした時の銀子さんの恥ずかしそうな表情でビームをバカスカ打ち込まれた日には死を覚悟した。今でもその名前を聞くと大笑いしそうになる。ぶぎゃー。的な意味で。

顔を顰めた僕に怪訝な表情を浮かべる少女に僕は表情を緩めてグラスを置くと真面目な表情で問い掛ける。

「どうして銀子さんに会いたいのかな？」

「うむ、ワシはな…『紅眼の銀狐』が欲しいんじゃよ。」

真面目な話と言う事で席を離れたアーベに心で感謝しつつ少女の答えを吟味する。

ふむ。と思考する僕に少女は思い出したように声を上げた。

「そう言えば名乗ってなかったの…ワシは「お嬢様あつ!!」…つと、なんじゃ…げっ!!」

ボタンとドアが壊れるんじゃないかと言う程の勢いで開かれ、荒い息を吐くメイドが現れた。

メイドはノシノシと大股で少女の傍に立ち、少女の首根っこを掴んで此方に優雅な礼をした後に凄く速さで去っていくという荒業をやったのだ。

ドップラー効果を残して少女の悲鳴が聞こえたが僕は何も見なかったことにして開いたままのドアを閉めた。

後ろではアーベが腹を抑えて笑いを堪えていて周りの客は何事も無いかのように思い思いに過ごしているのが腹立たしいと感じた日だった。

「そう言えば…」

名前を聞くのを忘れていたと思い出したのは帰ってきた銀子さんと
晩酌をしている時だった。

第2話 お金の価値（後書き）

次回は文字についても説明しようかと。
暫くは説明が続くのでプロローグ的なものだと思ってください。

第3話 文字の違い（前書き）

今回は文字についてです。

作中で説明しますがご都合主義ありまくりです。

第3話 文字の違い

「やあ、ユウ。久方ぶりだね。」

にこやかな笑顔でやって来た来客に僕もにこやかな笑みで返すと暇つぶしに読んでいた本に葉を挟んでテーブルに置いてお冷を一杯、彼女の前に差し出す。

白磁のような白い肌に蜂蜜を溶かした様な金髪に空のように青い瞳。街を歩けば10人の中9人は振り向くであろう美人の女性はある種族特有の耳をしている。

そう、所謂エルフという奴だ。名前はフィリアさん。

彼女達はその美貌と魔力の高さから少し…いややかなり選民思想な人が多く、大概は他種族を嫌って森で生活している。

その中で選民思想の無い変わり者のエルフ達は街に住んで冒険者や魔術師として生活する者達が多い。

フィリアさんは後者で良く銀子さんと組む事が多く、来た初めの頃はその美貌に見惚れてよくからかわれた。

「ユウ、ランチセットを一つ…と、また君はそんな物を読んでいるのかい？勉強熱心な事だ。」

「ははは、僕にとっては興味深い事ばかりなんですけどね？」

苦笑を返しながら置いていた本を仕舞って調理場に移る。

調理中に話しかけてくる事も無く、静かに本を読むフィリアさんを横目に何のタイトルを見ているのか気になった。

魔道書など、古代言語が書かれている品物は出回ることが少なく、迷宮でしか見つけられない事もあり、大体がこの街の王宮研究室に保管されている。

稀に隠し持って帰ってくる冒険者がいるが、古代言語が読めずに結局手放すと言う事も多い。

一度だけ銀子さんに見せて貰った事があるが思いつきり日本語だった事に吹いた。

銀子さんは苦笑しながら『読める事は秘密にしとかないと面倒な事になるから秘密にしときなさい。』と言われてからこの国の共通語を教えてもらった。

この世界は一つの大陸であり、神が作り上げた平面図に大陸があつて総ての国が一つの大陸の中に詰まっていると言われている。

それ故に地図もこの大陸しかなく様々な種族が暮らしているが故に共通語を作ることにしたのだ。

エルフ、ドワーフ、ホビット等、人間に近い格好をしている亜人族。ワーウルフ、ワーキャット、ドラゴニアス等、人間とは違った顔付きの獣人族。

そして人間族。

大別して3種類に別けられるのだが、その中で最も多い人間族の文字、言語を共通語とすることにしたのだ。

亜人たちの使う言語は僕達の元の世界で言う英語に近いものがあり、獣人が使う言語は中国語に近いものがある。

人間たちが使う言語は日本語に近いものがあるが、文字は全く違うものでローマ字になっているのだ。

本にすると読みにくい事この上ないが慣れればどうと言うことは無く、銀子さんから借りた歴史書や魔道書を読む事が僕の趣味の一つと言ってもいい。

それぞれ方言みたいなのもあるがここは割愛させていただく。

出来上がった料理をフィリアさんの前に置くと、彼女は読んでいた本を肩掛けかばんに直すとエルフ独特の食前の祈りを捧げてフォークを手に食べ始める。

つくづくお金の価値や文字や言語を考えるとおかしな世界だなと思いつつながら僕は洗い物を片付ける事にした。

チリンと鈴の音が鳴った。

フィリアさんと少し世間話をして彼女が店を出てから数分後にそんな音が聞こえた。

ふとドアを見るが来客ではなく、僕は首をかしげる。

チリンと再び僕の足元で音が鳴り、足元に視線を向ける。

「にゃー。」

そこには小さな白猫が手紙を咥えて座っていた。

僕はしゃがみ込んで猫と視線を合わせると猫は手紙を僕に押し付けて消える様に何処かへと去っていった。

「…ふむ？」

押し付けられた手紙には宛名も無く、可愛らしい薄ピンクの封筒の裏側の文字を見て僕は頭を抱えた。

第3話 文字の違い（後書き）

続きます。

第4話 迷宮とは？ (前書き)

第4話 迷宮とは？

封筒を開けて手紙の内容を確認した僕はせっせと迷宮に入る準備をして荷物をリュックに詰め込むと店の看板を『close』にして戸締り、火元の確認をするとドアに鍵を掛けて迷宮を目指す。

ここ迷宮都市ではいくつかの迷宮があり、東西南北に一つずつ迷宮が存在する。

迷宮にはそれぞれ難易度みたいなのがあり、それぞれランク付けされている。

東の『青龍の迷宮』西の『白虎の迷宮』南の『朱雀の迷宮』北の『玄武の迷宮』とあり、北↓南↓西↓東の順番にランクが上がっていく。

五行説だと中央に黄龍が来るんだけど思わず突っ込みそうになったがなんともまあ中国的と言うか日本的と言うか：

兎にも角にも僕が目指すのは北の迷宮であり、手紙の差出人である銀子さんはいま北の迷宮に潜ってお昼ご飯を所望しているらしい。

折角机の上に置いていたのにそれを持っていくのを忘れたらしく使い魔（白猫）を使って僕に持ってこさせたのだ。

基本的に迷宮に潜るにはギルドに所属しているかギルドに所属している冒険者が護衛に就いていないと入ることが出来ない。

しかし北の迷宮は1～2階層のみ危険なモンスターも居ないということ、一般人にも開放されており、2階層から下の階層に降りる入り口には一般人がこれ以上進めないように常にアルバイトの冒険者が待機している。

とはいえ1～2階層にモンスターが居ないとはい切り切れず、入り口から一般人を護衛する為の冒険者のパーティーも常に3グループ程待機しており、新米パーティーの大事な収入元の一つでもある。

ちなみに護衛する冒険者が集まらないときは都市にいてる冒険者にギルドから通達が来る事もあり、今日は銀子さんが所属するパーティーが呼ばれていたりする。

まあ、そんな所でもない限り自分が迷宮に潜ることは無いと思いがらのんびりとした歩調で北の迷宮を目指す。

迷宮の入り口で待機していたパーティーに護衛を頼んで3階層の入り口まで案内してもらう。

道中角の生えたウサギや二足歩行の犬を倒し、素材を剥ぎ取りながら2階層まで進む。

新米パーティーだからか手際はいいとはお世辞にも言えなかったが前衛3人、後衛2人とバランスも良く、問題も無く3階層の入り口に到着した。

護衛してくれたパーティーに礼を述べて、3階層へ降りる階段の横にあるドアをノックする。

中から返事が聞こえて出迎えてくれたのは銀子さんだった。

後ろを覗き込むと同じパーティーメンバーである大剣を磨いてる黒髪の青年と弓の弦を張り直しているファリスさん、杖を横に立て掛けて本を読んでいる赤髪のセミロングの女性が此方に少しだけ意識を向けて各々元の行動に戻った。

何時もの事なので気にせず銀子さんに昼食の入ったバスケットを手渡すと部屋に招かれ、全員分のお茶を淹れる。

「いやあ、助かったわ。」

「これで何回目ですか…全く…。」

はぐはぐとサンドウィッチを頬張る銀子さんに苦笑を浮かべながら手元のカップに注がれたお茶を冷ましながら嘆息するという器用なことをするファリスさん。

照れた様に苦笑する銀子さんに皆が笑いながらそれぞれに好きな事

をして時間をつぶす。

時間的にもうすぐ別のパーティーと入れ替わると言う事で帰りは銀子さんと一緒に帰ることとなった。

「よし、そろそろ交代だし帰ろっか♪」

うーん、と先程まで寝ていた身体を起こすと銀子さんは身体全体を解す様に動かすと立ち上がりリュックを掴もうとして…ドアを蹴り開ける。

その突然の行動に吃驚する僕を他所に他のメンバーも手信号と目で合図を送り、フィリアさんが僕を護る様な立ち位置で弓を構える。

「悠人は銀子を追って、エリスは回復魔法の準備！」

「…了解。」

「おっけー。」

二人は短く了解の意を示すとそれぞれの役割を果たす為に行動するのだった。

第4話 迷宮とは？（後書き）

次回は戦闘描写だから時間かかるかも（汗

第5話 現実と夢幻（前書き）

就職活動の為暫く書けませんでした。
申し訳ありません。

第5話 現実と夢幻

3階層へ続く階段から昇って来たのは傷だらけの冒険者たち。

中には片腕が在り得ない方向に捻じ曲がっている者も居り、その光景に思わず口元を押さえて吐き気を堪える。

何があったのか判らないが彼らはナニカから命からがら逃げてきたのだろう、近寄ってきた銀子さんと悠人さんを視界に納めると気を抜いたのか崩れ落ちるように座り込んだ。

「何があったの!？」

「…ジャ…ジャイアントオークが…2匹…上の階層まで…」

ジャイアントオーク、豚に酷似した頭部に平均全長4メートル程の巨体を持つモンスターで手に持った棍棒を力の限り振り回して攻撃してくる。

彼らは基本的に10階層から15階層をうろつくモンスターなのだが、何かしらの理由で上の階層まで昇ってきたらしい。

知能は低く、食欲旺盛な為、餌を求めて昇ってきたと考えられたが原因等わかるはずもなく、エリスさんが怪我人を回復魔法で治療して詳しい話を聞いている。

まだ治療途中の為、余りにも多い血の量や、怪我のグロテスクさから眼を逸らす為、ジャイアントオークの方に視線を戻す。

悠人さんと銀子さんの拳でボコボコにされているジャイアントオーク。

悲鳴を上げて絶対強者の二人から逃げるように棍棒を振り回している彼らにどちらが化け物か判らなくなる光景にこめかみを押さえる。

命からがら逃げてきた冒険者たちは目の前の光景に啞然としており、僕はただただ溜め息を吐くしかなかった。

ギルドにジャイアントオークの件を報告し、銀子さん達と家路に着く。

辺りは既に暗く、近くの酒場では冒険者たちの笑い声や喧嘩の音、野次の声が聞こえてくる。

少し視線を外せば広場では恋人達が愛を語らっているのだろうベンチでイチヤイチャしているのが見える。もっげーろ。

ふと空を見上げる。

前の世界では見る事の無かった二つ月。

赤い月と青い月が重なるように浮かんでいる姿につくづくこの世界は異世界なのだと思い知らされる。

此方に来るまではただの学生だった自分が今ではこうして異世界で助けられて喫茶店のマスターを手伝っているという事に未だに信じられないでいるのである。

ふとした拍子に気が付くと自分の部屋で寝ていてこの世界での事が夢だったんじゃないかと思ってしまう。

そしてこれが夢だったら良かったのに、とそんな事を考えてる自分

に気付いて思わず苦笑してしまう。

「…なあにクスクス笑ってるのよ？」

そんな僕に気付いた銀子さんがからかう様に肘で小突いてくる。

僕より頭一つ小さい身長なのに何倍も大きいジャイアントオークを拳一つで黙らせてしまう事実が僕の夢なんじゃないかという想いに拍車がかかる。

しかし今こうして話している彼女は正しく現実にいる人物で、こうして触れ合えている事に何処か安心してしまう自分が居た。

「いえ、やっぱり銀子さんは銀子さんだなと。」

「何よそれえ。」

残して来た物は多いけれども、なんとなく…そう、なんとなくだけれどもこれからこの世界で頑張っで行こう。と思える日だった。

第5話 現実と夢幻（後書き）

戦闘描写無理ですorz
慣れるまで戦闘描写書きません。

第6話 ギャップ萌え？

キュツとグラスを磨く音が店内に木霊する。

閑古鳥が鳴くとはまさにこの事かと考えながら本日何度目かの溜め息を吐く。

外は快晴、雲ひとつなく青々とした青空が広がっており、道行く人々は皆幸せそうに笑顔を浮かべて歩いている。

それをカウンターからぼんやり眺めながら再び溜め息が漏れる。

「こゝらっ。」

ポカリと頭をお盆で殴られる。

振り返るとお盆を振り抜いた格好で銀子さんが立っていた。

「溜め息を吐くと幸せが逃げるらしいわよ？」

銀子さんは陽光を浴びて光る銀髪を揺らしながら楽しそうに笑っている。

クスクスと上品に笑うその姿は一枚の絵画のように見える。

少し赤くなる頬を自覚しながら僕は苦笑を浮かべて答える。

「なら、もう僕に幸せは残ってませんね？」

「あら、こんな美人と一つ屋根の下で過ごしてるのは幸せとは言わないのかしら？」

悪戯っ子の様な笑顔を浮かべて僕をからかう銀子さん、それに苦笑でしか返せない自分に僕は少し情けないな。と思いながらもいつか見返してやると心に誓い磨いていたグラスを棚に戻す。

「あ、そうそう私これから迷宮に潜るから暫く帰って来れないから店番お願いね。」

ふと思い出したように銀さんは手を打つとそんなことを言い出した。

まあ、時折こうして迷宮に潜ってお金を稼がないと店の経営も成り立たないのだから仕方ない。

ただでさえツケを溜めていく客も居るのだ。アーベとか。

喫茶店だけではどうしようもない。

何時もの事なので僕は首肯し、銀子さんから店の鍵束を預かる。

「それじゃあいつてきまゝす。」

銀子さんはエプロンを脱ぐと椅子に掛けてあったコートを羽織って

出て行ってしまう。

冒険者にしては軽装で黒いズボンにシャツ、ポケットの多いコートを羽織っただけで行ってしまう。

一度キュリエルさんに聞いたことがあるがあの軽装だけで迷宮に潜ること自体がありえないとか。

低階層の上層部：つまり1～3階層目ぐらいは成人男性がある程度の装備を纏って一人で探索出来るレベルなんだとか。

銀子さんは常に一人で潜るらしく時折中階層でも見かけるらしい。

大丈夫なんですか？と聞いた事もあったが銀子さんは何食わぬ顔で「大丈夫よ。だって私バグキャラみたいなものだし。」って笑顔で答えていた。

それ故に心配するのも無駄だと諭されてしまい、今はこうして銀子さんが潜ると言う時は大人しく鍵を預かって銀子さんの帰りを待つ事になっているのである。

：決して護身術の訓練で目の前で指からビームみたいなのを出した銀子さんを思い出したからではない。

夜になると都市の雰囲気も変わる。

一般人はそれぞれ家路に着き、冒険者たちは迷宮から帰還して今日の収穫を都市に還元するのだ。

勿論我が喫茶・蒼翠も夜になるとメニューを少し変えてアルコールを出す事になっている。

日中は特に無いが夜になると冒険者という荒らくれ者達が来ることもあって柄の悪い客が多くなるのは致し方が無い。

しかし、と思う。

「なあ、マスター？聞いてる？」

「ええ。聞いてますよ？」

「なら早く紹介してよく、俺これから魔王を滅ぼす為に仲間を探さなきゃならないんだから。…あ、出来れば可愛い子で。」

突然来たこの少年はやってきていきなり「俺は魔王を倒す勇者だ！共に旅する仲間を紹介してくれ！」って元の世界では厨二病と言われる様な妄言を吐いてきたのだ。

あれか？ドラ○エか？と思いはしたが生憎家は喫茶店だ。

夜になるとアルコールは出すが飽くまで喫茶店である。

言わせてもらえば物凄く面倒だ。

周りの客もニヤニヤと此方を肴に酒を飲んでる始末。

というか僕自身も相手するのにかなり面倒臭くなってきた。

そもそも魔王って何だ魔王って…。

「出来れば僧侶とか欲しいんだけど…あれ？もしかして始まりの街だから戦士しか居ないとか？…まあ、いいや兎に角一緒に旅する仲間を紹介してくれて！」

「お客様。一応ここは喫茶店でして…そういうパーティーメンバーの募集はギルドの方で受け付けていますのでそちらにお行きください。」

「は？だってここ酒場だろ？仲間を探すなら酒場っていうのが基本じゃねえか。」

何を当たり前な。みたいな顔をされても困るんだが…。

しかも遠く離れた席でこっち見てゲラゲラ笑ってる常連もいるし。

はあ。と溜め息を吐くと来店を告げるドアベルが鳴り、金髪の剣士がまっすぐにこちらに向かって歩いてくる。

少し吊り眼の成年男性よりも僅かに高い身長。すらりと伸びた足に身体全体を覆うプレートメール、腰まで届く金髪に深紅のマントを靡かせる彼女にヒューと誰かが口笛を鳴らす。

街ですれ違えば殆どの男性が振り返る美貌に親しい者に向ける笑みを浮かべて彼女はカウンター席に座ると慣れたように500円玉を僕に弾くと少し低めのハスキーボイスで注文する。

「マスター、息災かい？何時もの…頼めるかな。」

「畏まりました。僕は何時もと変わらずですよ、ファリスさん。」

弾かれた500円玉を中空でキャッチし、僕は厨房に立つ。

そんな仕草が様になるファリスさんの登場で僅かに納まった喧騒、それを裂く様に先程の少年が熱心にファリスさんに声を掛けていた。

「やっぱり主人公の前には主要キャラが来るってかあ！…お、お姉さん！俺と一緒に冒険に行きませんか！？」

「……君は？」

警戒心を顕わに対応するファリスさんに少年はまるで気付かず、一気に捲くし立てる様に言葉を紡ぐ。

聞き取れたのは少年が三下^{みした} 一流^{かず}と言う名前と自称勇者。それから

魔王退治に行く為にファリスさんの力を貸して欲しい。

とまあ、妄想癖のある少年だと結論付けて僕は出来たばかりのパス
タをファリスさんの前にそ、と置き困った様にこちらを見るファリ
スさんを助けるために自称勇者に向き直る。

「お客様、他のお客様のご迷惑になる行為はやめていただけませんかね？」

少し怒気の籠もった声で告げると自称勇者はう、と呻くとそそくさと店の端っこに寄ってしまった。

むしろ出て行けと思いつながら溜め息を吐くとすまなさそうな表情の
ファリスさんと眼が合う。

「すまないね、マスター。」

「いえ、少しばかり眼に余りましたから。」

ファリスさんに苦笑を浮かべて応えようと手元のグラスを拭き直す。

それでも初めの頃のファリスさんに比べて話す様になった。

元々の性格か彼女は人見知りが激しくこうして話すまでに幾許かの
時を要した。

何しろ注文もモゴモゴと口の中で呟いて聞き取りにくかったし、料
理を持って行ってもビクビクしていたし、声を掛けたら悲鳴を上げ
て店の隅まで逃げて観葉植物の裏に隠れるし、なにこの可愛い生き
物。って思っただくらいだ。

あんまりにもあれだったから銀子さんがそうまでして此処に来る理由を聞いて何か邪な笑みを浮かべていたので気になった僕が理由を聞いたら顔を赤くして昔みたいにもごもごと詰まってしまう為に結局聞けず仕舞いである。

機会があればもう一回聞いてみようと思うのだが：

「ごちそうさま、マスター。」

と、そこまで考えてファリスさんが空の食器を手には立っていた。

僕はそれを受け取って流しに置くと食後のデザート自作のチョコケーキを差し出す。

それを見てキラキラと眼を輝かせてストン、と席に座ってフォークを構えてケーキから眼を離さないファリスさんに癒されつつ食器を洗い出すのだった。

第6話 ギャップ萌え？（後書き）

表現力不足ですなorz
もうちょつと精進します。

第7話 価値観（前書き）

おにゃのこ成分低めです

第7話 価値観

麗らかな午後のティータイム時。

カランとドアベルがなり、来客を告げる…そこから現れたのは深紅の鱗を纏った龍人…ドラゴニアスと呼ばれる種族の青年だった。

「いらっしやいませ。」

来客を迎えて、僕は手に持ったグラスに態とベタベタと指紋を付ける作業を一時止めて彼の手元の袋に視線を奪われる。

「やあ、店主…相変わらず客が無くて暇そうだね。」

獰猛な…ドラゴニアスの観点で見れば爽やかな…笑みを浮かべて彼、ラニアスは手に持った袋に手を突っ込んで中身をカウンターに広げ始める。

「相変わらずって…君が来る時間帯がたまたま客が来ないだけだよ。」

「ふーん、まあ、そういうことにしておくよ。」

苦笑を浮かべる僕の言葉を軽やかにスルーして彼は鼻歌交じりに袋から次々と荷物を取り出しては並べていく。

彼が取り出しているのは数種類のハーブと葉草等の植物が多くを占めていた。

一部鉱石や装飾品もあるが殆どが植物でこの地域にはあまり生えていないものが多い。

「いつもありがとう、ラニアス。」

「なに、里帰りついでに友人に頼まれたものを採って来ただけだよ。」

寧猛な：ドラゴニアスの価値観では柔和な：笑みを浮かべて彼は席に着く。

そんな彼の目の前に全長60センチはあるパフェを置き、彼が持ってきてくれた薬草やハーブを厨房裏に持って行き、後で選別作業をする為に机に置いておく。

厨房裏から出てくると寧猛な：ドラゴニアスの観点では嬉しそうな：笑みを浮かべてパフェに食らい付く彼を見て苦笑を浮かべる。

ちなみにこの時間帯にお客が少ない、又は来ないのは彼がこの時間に顔を出すからだとは口が裂けてもいえない。

ドラゴニアスという種族は簡単に言うと二足歩行をするドラゴンである。

どちらかと言えば西洋のドラゴンに形が一番近く、彼らの特徴といえばその属性毎に鱗の色が変わるのである。

赤ならば炎、青ならば水、翠なら風、茶なら地とそれぞれに分かれていて、鱗の色が鮮やかであればあるほど彼らは力強いのである。

近接戦闘を好み、闘争本能が強い彼らが一人でもパーティーに居ればそのパーティーランクは一つは上がると言わしめる程に彼らは強い……が、その見た目からか中々パーティーメンバーに誘われることが無く、大抵のドラゴニアスは一人で行動しているのが多い。

ラニアス曰く、笑顔を浮かべるといつ食われるか判ったものじゃない。と言われて断られ続けたらしい。

今では悠人さんのパーティーに入ってるラニアスであるが入るまでは人間不信に陥る一歩手前だったとか。

上記の理由によって人間不信になる事も少なくない彼らの生息地はこの迷宮都市付近では手に入らないハーブや薬草がたくさん生えているので月に一回ラニアスが帰省する度にこうして採ってきてもらい、その値段相応の食券を渡しているのだ。

現金を渡そうとしたらラニアスは「タダ同然で手に入れたものだしそれは悪い……現金より甘い物が食べたい。」と獰猛な……しつこいがドラゴニアスの観点で見ると朗らかな……笑みでそれを一蹴、ならばと渾身のパフェを作り上げて彼に出すと非常に喜んで頂き、それ以降彼への報酬は全長60センチのパフェとなったのだ。

再びドアベルの音が鳴った。

「あー！お父さん帰ってきてたのーっ！？」

「ラ、ララ！？」

ドアを開けて飛び出してきた少女はラニアスの姿を見つけると電光石火の勢いで飛び掛る。

そう、この事から判るように彼、実は既婚者なのだ。

相手は人間の女性で結婚した理由が「私、爬虫類って好きなのよねー♪」とあんまりにもあんまりな理由で結婚したらしい。

なにより人間の男より爬虫類が好き！と公言している辺りどうかしている。

そんな夫婦の間に産まれたのが目の前の少女、名をララと言う。

母親譲りの美貌に父親譲りの真っ赤な髪、耳の後ろから生えているドラゴニアスの象徴とも言える枝の様な角にお尻から生える真っ赤な鱗を纏った尻尾。

俗に言うハーフトラゴニアスの彼女はその外見からは想像も出来ないがかなりの力持ちである。

この間も僕のお手伝いするー。と言って僕が持ち上げられなかったお酒の入った樽を軽々と持ち上げた事は記憶に新しい…あれ？何故か眼から心の汗が…っ。

それは兎も角そんな彼女が電光石火の勢いで父に飛び掛ったのだ。

まるでガードレールに思い切り突っ込んだ車の様な音を立ててラニアスの胴体にしがみつくウラ。

具体的に言っているとドガッ！とかいう音が聞こえた。

それでも体勢を崩さない辺り流石と言うかなんと言うか…ラニアスは獰猛な…ドラゴニアスの観点で言っているとデレデレした…笑みを浮かべて娘の頭を撫でていた。

もう何と言うか人間もドラゴニアスも男親は自分の娘には甘い物だと僕は苦笑を浮かべるしかなかった。

次の日、朝早くラウちゃんは店の前に立っていて僕のお手伝いする
1。と言って勝手知ったる人の家とばかりに酒蔵に入り込んで僕一
人では持てない酒樽を店の厨房まで持ってくる作業を手伝って貰っ
た。

…人には向き不向きがあるんだよ。

手伝って貰ったご褒美にお父さんと同じパフェを差し出すとそれは
もうキラキラした眼でぱく付いていた。

…べ、別に泣いてなんか無いんだからねっ！

ちょっと鍛えようかなと思ったのは僕の秘密だ。

第7話 価値観（後書き）

おにゃのこ成分が…っ！足りないっ！！

第8話 ロリ、再び（前書き）

ロリ再び

第8話 ロリ、再び

嫌な予感を感じた僕は昼のピークを過ぎたぐらいで店を閉めようと準備し始める。

しかし無情にもカランとドアベルがなり、この間やってきてすぐメイドに連れ去られたツインテールロリが居た。

「来てやったのじゃ！」

凄く…偉そうです…。

「で？」

暫く踏ん反り返って此方を見下ろそうと頑張るロリ。

身長差でどうしても見下ろしてしまう僕の視線に耐えかねたのかロリはいそいそとカウンター席に座ると机をバンバン叩いて駄々を捏ね始めた。

「店主！ワシは『紅眼の：』あ、メイド。」ひいひいっ！！ワ、ワシはまだなにもしておらんぞ！マリア！！」

銀子さんの厨二的な二つ名を言おうとしたので後ろを指差してメイド。と言うと面白いくらいに怯えて頭を抱えていやいやと首を激しく横に振っている。

：何故か悪い事をした気分になるのは何故だろうか？

というよりそこまでメイドに怯えるロリに普段何をしているのか凄く気になる。

：気になるといえば…。

「そう言えばまだ君の名前、聞いてなかったね。」

その言葉にロリは顔を上げると涙目で此方を見上げて震える声で問う。

「ぐすっ…マリア…いない…？」

普通にすれば可愛い子なんだけどなあ。一人称があれだけど。

「ああ、いないよ。」

そう首肯すると恐る恐る後ろを見…僕を見上げて…いきなり僕に殴りかかりに来た。

「ば、馬鹿者！！驚かせるで無いわっ！！」

ぽかぽかと殴りつけるロリを落ち着かせるのに多大な労力を割いたがここは割愛する。

…決してお菓子とかで釣ってないよ？

釣られたクマー。

「ワシの名はクラウド・デイス・アルマナ・オルトーンである！」

目の前でロリがニコニコとケーキをぱく付いている。

ほったに付いたクリームをそのままに名乗る姿は微笑ましく、しかし態度はでかい。

しかも名前が長い。もうロリでいいや。

「で、そのロリは銀子さんに会ってどうするのさ。」

溜め息と共に呟いた僕にロリはその柳眉を跳ね上げる。

「ワシの名はロリではない！クラウド・デイスじゃ！！言い難ければラ・デイスで構わん！」

「はいはい、で、ロリは何の為に…」

「きいー！ー！ーっ！！」

凄く…面白いです…

きつと今の僕の顔は物凄く悪い顔をしているだろう。

そうやって暫くロリをからかっているとドアベルが鳴り、息を切らせたメイドが入ってくる。

「お嬢様あああっ！！またここですかあああっ！！」

ドカバキィッ！とドアを蹴り破る…というより蹴り破ってやって来たメイドはぜーはーと息を切らし、ロリを視界に納めるとその身体を片手で持ち上げて米俵の様に担ぎ上げると優雅に此方に一礼すると物凄くいい笑顔で…

「失礼いたしますわ。」

そーういーい残して嵐の様に去っていった。

薄ら寒い笑顔に胃痛と頭痛を感じ、その痛みに顔を顰めた。

溜め息を吐きながらロリことラディスが咄嗟に食べきったのであるろうケーキの食器を片付けるとある事を思い出した。

「お勘定、払って貰ってないや。」

ドアを見るとドアガラスが碎け散っていた。

…そりゃあんな勢いで蹴り開ければねえ…。

収まらない胃痛と頭痛に顔を顰めつつ僕は箒と塵取りを取りに倉庫へ向かう。

後日オルトーン家にガラスの請求代とケーキ代の請求を行うのだった。

第8話 ロリ、再び（後書き）

ロリっ娘、参上！

ようやっとな前がきm（r y

第9話 縁日（前書き）

今日は縁日があったので行って来ました W

一人寂しく（おい

第9話 縁日

「おい！縁日に行こうぜ！！」

突然だが今日は縁日である。

昼のお客様を捌き切った直後に来店したアーベから縁日に誘われた。突然なので店を急遽閉める訳にもいかない為、銀子さんに相談することにした。

「え？縁日？行く行く！！」

と、物凄い乗り気でのんびりとコーヒーを飲んでいた常連を追い出して奥から何着もの浴衣を引っ張ってきては店の鏡の前で一人ファッションショーをしている。

常連に物凄く申し訳ない気持ちになりながら頭を下げると「いつもの事だから気にしてないよ。」と笑顔で去って行った。しかしお金は払わず。

流石に追い出した手前請求出来ないのでもしかしてそれを狙ってるんじゃない。と邪推もしたがまあ、悪いのは此方なのでなんとも出来ず…僕は嬉しそうに浴衣を着替える銀子さんを眺めた。

夕方、日も暮れて祭り独特の空気が辺りを包み込む。

元の世界でも良く見たかき氷に焼き鳥、たまごせんべえ、りんご飴に綿飴や射的など様々な露天を銀子さんと並んで歩く。

銀子さんは長い銀髪を結い上げて普段とは違う衣装を身に纏ってい

る為か隣に立つだけでドギマギしてしまう。

手には綿飴、イカ焼き、りんご飴、ヨーヨーにフランクフルト、たこ焼きにチョコバナナと器用に両手で総て持っている銀子さん。

頭にはお面が被さっており、幸せそうに綿飴を頬張る彼女は何時もの凜々しい顔付きとは違ってとても新鮮だった。

僕の手には先程出店で買ったラムネが握られており、僕の隣にいたはずのアーベは早速ナンパへと勤しんでいる。

こんな所まで来て何をしているのかと注意したのだが彼は「ナンパせぬは男にあらず！！このリア充があっ！！」と訳の分からない事を叫んで涙を流して走り去っていった。

ちなみに祭りに行くと大概のカップルが多いよね？僕だけだろうか？
？そう思うのは…。

まあ、戦果は芳しく無いのか所々に声を掛けては撃沈していくアーベに思わず苦笑してしまう。

「あ、ゆうくん、今度はあれ食べようよ。」

銀子さんはマイペースに次の獲物（焼きそば）をロックオンすると僕の手を引っ張っていく。

なんか気分は祭りに無理やり連れて来られたお父さんの気分だ。

祭りの醍醐味といえば、なんと答えるだろうか？

踊り？花火？それとも恋人達の語らい？

「偉い人は言いました。祭りの醍醐味は仲の良いカップルを引き裂くことだっ！！」

「と、言う訳で…」

何やら覆面を被った変態^{アヘベ}にいきなり肩を掴まれ…

「我等の嫉妬魂を受けるが…どうわっ！！」

投げられそうな所を投げ返した。

まあ、馬鹿は放って置いて祭りの醍醐味、個人的にはやはりその場の空気というか活気と言うか…まあ、雰囲気が一番好きなのである。

天に咲く華に踊る阿呆。

楽しそうにそれらを眺め、徳利片手にチビチビと酒を飲むのが一番好きなのである。

ガヤガヤと騒がしい街の中心で大きな篝火が灯されていた。

その篝火を囲む様に人々が思い思いに踊っている。

僕は近くの芝生に並んで座ってそれを眺めていた。

「あら、今年は盆踊りなのね。」

銀子さんは何処からか徳利を取り出して既に一杯、？んでいる。

頬は上気して艶っぽい空気を出しているので結構？んだようだ。

僕は溜め息を吐き、銀子さんの手から徳利を奪い取る。

「あゝ！何をするのよおゝ！」

「幾ら何でも？み過ぎです。」

「ぶうゝ…。」

奪い取られた徳利を取り返そうと腕を伸ばす銀子さんから庇う様に徳利を隠すと銀子さんは子供の様に頬を膨らまして拗ねてしまった。

思わず笑みが浮かんでしまい、それを隠す為に徳利を口元に運んで中身を一口飲む。

喉を焼くアルコールに思わず顔が少し歪んでしまう。

「ふふふゝ、子供にはまだ早いわよゝ。」

悪戯っ子の様な笑みを浮かべて僕から徳利を取り返した銀子さんはそのまま中身をきゅーっ、と飲み干して僕に寄りかかる。

お酒を飲んで少し体温が高くなったのか汗ばんだ銀子さんの身体から僅かな酒気とちょっぴり甘い匂いがして少し鼓動が早くなる。

「ん…。」

もぞもぞと銀子さんは動くとそのまますう、と寝息を立ててしまった。

肩に掛かる銀子さんの重みを感じつつ、空を見上げる。

今日の祭りではり前の世界の事を思い出してしまう。

何処か似ている為か余計にそう感じてしまい、思わず涙が出そうになる。

「…帰りたい…のかな…。」

ポツリと呟いた言葉は誰に聞かれることも無く祭りの熱気に溶けた。

第9話 縁日（後書き）

リア充はもげてしまええっ！！
（泣

第10話 エアーマンが…倒せない!! (前書き)

題名とはあんまり関係ない。

第10話 エアーマンが…倒せない!!

今日は、何故か視線を感じる。

何時もの様にグラスを拭いていると何処からか視線を感じる。

なんというかこう…嘗め回すような視線？

思わず背筋が冷えてしまった。

気を取り直すように拭いていたグラスを棚に片付けて自分の昼食用に作ったサンドウィッチを一つ摘んで口に放り込む。

サンドウィッチを咀嚼しつつ、カウンター裏の冷蔵庫からミルクを取り出してグラスに注ぐ。

行儀が悪いがまあ、いいだろう。と自分を納得させてカランと鳴ったドアベルに視線を向ける。

「いらっしやいま…あれ？」

取り敢えず口の中の物を飲み込み、来客を迎えようとして違和感に気付く。

「誰も居ない？」

確かにドアベルは鳴った。

しかし肝心の来客の姿が見えない。

ふむ。と僕は思わず唸ってしまう。

「…あ、あの…。」

と、物凄く小さな声が近くから聞こえた。

キヨロキヨロと辺りを見渡すが影も形も見当たらず、首を傾げる。

「あ…こ、ここ…です…。」

取り敢えず声が聞こえた辺りまで行こうとカウンターから出て店内を歩き回り…

「きゃう！」

「うわっ!?!」

何かにぶつかった。

「いやあ、気付かなくてごめんね？」

「い、いえ…何時もの事ですから…。」

ぶつかった何か…彼女はどうかや獣人らしく、名前をルニカ・トウ
リイトと言らしい。

僕の胸ぐらの身長で翠の前髪が彼女の顔半分を隠してしまっていて
少し暗いイメージを持ってしまいそうな少女である。

あれだけ鮮やかな髪なのになぜ気付けなかったのか、と思わず唸っ
てしまう僕に彼女はおずおずと口を開く。

「わ、私…すごく…空気だって…み、みんなから…褒められて…ま
すから…。」

…それって褒めてるの？

思わず聞き返そうとしたけど何か本人が誇らしげに言っているので
言わないで置こうと思った。

ので、話題変換も兼ねて取り敢えず注文を聞くことにした。

「そ、そうなのかい…それじゃあ注文は何にする？」

「え…えつと…あの…その…。」

ビクビクと此方の表情を伺うルニカに苦笑を浮かべてメニュー表を差し出す。

「…言い難かったらここから指差して選んでくれたらいいよ。」

「あ…はい…それじゃ…これを…特盛で…」

指差したメニューはちよつと前にふざけて創った激辛カレーの特盛。

「…これ、すごく辛いけど…大丈夫？」

過去に一度アーベに無理矢理食べさせて病院送りにしたカレーである。

とてもじゃないがルニカみたいな子が食べれるものじゃない…と思う。

「だ…大丈夫…です…」

「そ、そう…分かった…少し待っててね？」

まあ、本人が大丈夫って言ってるし…メニュー表にも自己責任って書いてるから…大丈夫…だよな？

「お待ちどうさま。」

持ってきた激辛カレーを彼女は受け取ると行儀良く手を合わせて「いただきます。」と言って食べるのだった。

この姿を数十分前の僕に見せてやりたい。

淡々と…激辛カレーを処理して行く姿に僕は戦慄した。

「…大丈夫？辛くない？」

「へ…平気です…」

もくもくと食べる彼女の姿はリスみたいで可愛いのだが…食べてる物が食べてる物だ。

しかも特盛。

学生達の罰ゲームとして使われる程のメニューなんだけどなあ。と頭を掻いて一心不乱にしかも汗一つ掻かずに食べる彼女を見て鍋に少し残ったカレーを舐めて見る。

「…辛っ！」

慌ててさっき出したミルクを口に流し込んで辛さを中和する。

ちらりとルニカに視線を向けるとそれはもう幸せそうにカレーを頬張っていた。

「…ご馳走様でした。」

空になった皿とスプーンを僕に返してくれるルニカ。

その顔は満ち足りており、美味しかったです。と笑顔でお礼を言われてしまった。

僕は苦笑してお粗末様。と返してグラスを拭く作業を始める。

すると彼女はニコニコと…

「…ま、また来ますね…あ、あと、お腹が…空きすぎて…サンドウィッチ…勝手に食べちゃって…ごめんなさい…。」

「ん、またおいで…ってサンドウィッチ…？」

ふと僕の昼食用のサンドウィッチの更に目をやる。

作った分は4つでその内皿にはもうサンドウィッチの影も無い。

そして僕が食べたサンドウィッチは…一つだけ…あれ？

「は、入ってから…き、気が付いてくれませんか…ドアを…もう一回…開けました。」

「あ、あはは…。」

僕はただ苦笑するしかなかった。

第10話 エアーマンが…倒せない!! (後書き)

これうpしたら寝ます。

第11話 剣の妖精？（前書き）

仕事に追われて書けませんでしたorz
しかも蓄膿症まで併発…もうだめぽorz

第11話 剣の妖精？

「あ、剣が折れた。」

この言葉から今日の出来事は始まった。

それは何時もと変わらない日だった。

銀子さんが久しぶりに剣でも使って特訓するかぁー！とノリノリなテンションで裏庭へ出た時に止めておけば良かったと後悔している。適当に樽に突っ込んでいたそこらへん（迷宮の宝箱）からかっぱらってきた（持ち帰ってきた）剣を手に正眼に構える銀子さんに相対するように僕は盾をしっかりと構え、片手剣を握る。

ぱっと見た感じおどろおどろしい気配を漂わせる剣に僕は冷や汗を掻きながら銀子さんい問いかけようと構えをずらした瞬間だった。

「隙ありいっ！！」

咄嗟に首筋を護るように片手剣と盾で剣を銕み込むように防御した瞬間、それは訪れた。

「あ、剣が折れた。」

「ちょ…っ!!」

剣が折れた瞬間、風が辺りに吹き荒れて僕たちを包み込んだ。

「ふむ、主が我の主かえ？」

「はい？」

声が出たので恐る恐る目を開けると目の前に黒髪の和服の美女が目の前に立っていた。

それはもう威風堂々と…分かる人が分かる言い方をすると言気は我様な金ぴか。

此方を見つめる金の瞳に自身の身長を超えてなお余りある黒髪。

やたら艶のある舌なめずりに思わず僕は言った。

「あ、すいません。人違いです。」

「そ、そうか…？ってそんな訳無かろうがあっ！！」

僕は穏便に済ませようとした。ただそれだけだったんだ。…別に面倒くさそうな雰囲気が出たからとかじゃないよ？…たぶん。

取り敢えず逃げようと身体を反転させるがどういう訳か目の前からその美女が離れない…比喩的表現ではなくて…。

「…あるえ？」

「つたく、此処には我と主しか居らんだろうが…大体主は…」

ぶんすかと擬音が付きそうな体勢で此方を怒りしかも説教を始める美女。

うわ、面倒くさいのに掴まったと思い切り渋面を作って腕を組んで話が終わるのを待ってみる。

「…であるからして…。」

大学の教授でもここまで長い話をしないのでは？と思うほどに時間が経ち、そろそろ眠くなってきた頃…。

「…そもそも男とは…」

「あ、ごめん、もう…無理。」

「ん？あ、主！話はまだ…！！」

僕の意識は落ちた。

「おい、ゆうくん…早く起きないと首と胴体が泣き別れちゃうぞ…？」

そんな銀子さんの目覚ましで僕は目が覚めた。

目を開けると笑顔で剣を大上段に構えてる銀子さん。

咄嗟に横に転がった瞬間にそれは振り下ろされた。

…正直怖かったです。

訓練後、銀子さんに剣が折れたか聞いたがそんな事は無かったし何時も通りキッチンとあれから数合は持って吹き飛ばされたとの事だった。

はて？あれはなんだったのか…？

気になって樽の剣を一本覗き込んでみたらよく磨かれた刀身にあの美女の顔が映って僕に向かって何か言っていた。

『ツ・ギ・ハ・ノ・ガ・サ・ナ・イ』

これって呪いの剣じゃ…？

第11話 剣の妖精？（後書き）

何が書きたかったのかは自分でも分からなかった。
余りの痛みに：明日耳鼻科行つて来ます。

第12話 僕の休日って…（前書き）

仕事忙しいですorz

今回は主人公がいまさら気付いた事。

第12話 僕の休日って…

何時ものようにゆったりとした午後。

周りには何時もの常連が思い思いに過ごしており、コーヒーの芳醇な香りが室内を包み込む。

「ああ…平穏って素晴らしい…。」

思わず呟いた僕はグラスを拭きながら店内を見渡す。

ラニアスは今日は娘と嫁と家族で海に行くとか言ってたし…アーベは今日は迷宮に探索に行くとか言ってたなあ…。

銀子さんは悠人さんのパーティと一緒に迷宮に潜ったし…ロリは知らん。

最近ちよくちよくと顔を出す半常連と化してきている人達も居るには居るが…なんというか騒げないとかそういう理由であまり来る事は無い。

ああ、今日は全く持って平穏な日常ではないかつ！

そう考えてふと思いつく。

あれ？僕って休日いつもなにしてるんだっけか？

そもそも僕に休日ってあったっけ？

此方に来てから大分経つけど…休日って貰った事無いよなあ。

……そこまで考えて僕は気付いた。

僕に休日と言うものは…無い…だっ！？

あまりに暇すぎて変な所まで行ってしまったがその間にお客様から来た注文はキッチンと聞いている。

少し離れた場所にあるボックス席を陣取る同じ様な服を来た…まあ、俗に言う学生みたいな感じの人達の注文の品を作っているわけで…。

ちなみに学生みたいなと評したが、事実彼らは学生であり、この迷宮都市を研究する研究所の学生である。

その分野は多岐に渡るが最も多いのがモンスターを解剖したり、巢に潜り込んだりして生態を調べる事なのである。

中には冒険者科と言って冒険者になる為のイロハを学ぶ者も居るのだ。

まあ、そんな彼らは割合この喫茶店を利用してくれる。

学生故に酒場等、冒険者が屯する所を利用すると周りの冒険者達から洗礼を受けることもあるのだ。悪い意味で。

その点喫茶店だと周りがお節介を焼きすぎること無く、程好い距離で助言をしてくれたり、我関せずを通す人が殆どだからだ。

まあ、この喫茶店で騒げば怖い銀色の悪魔が出て来ることは有名なので騒ぐ馬鹿が居ないともいうが…。

そんな理由でよくここを利用する学生も多いと言う訳だ。

今日来ているグループは冒険者科の生徒が3人と研究科の生徒が2人。

男2、女3の割合でそれぞれ仲が良い。

よく僕にも話しかけてくれるし、僕からもドリンクをサービスした事もある。

しかし今日は何かそわそわしているように見える。

「あ、マスター。」

「はい？」

そんな5人の中でマスコットのなキャラだろう白銀の髪を二つに結い上げた見た目少女な子、名前は確か…そう、セレス・ラグドリアス。

彼女の身長は僕の胸ほどで、必然的に僕が見下ろす形になる。

琥珀色の目をしており、何より目を惹くのがその胸部装甲である。

同じような身長のロリとはまた違ってたわわに実ったその果実は幾人もの男の視線を独占したのだろう。

時折彼女の友人の一人が恨みがましい視線をその胸に送っているのを見たことがある。

「あ、あのね…マスターって…。」

そんなセレス嬢がもじもじと上目遣いに頬を染めて此方を見上げてくる。

そんな表情にグッとくる物があつたがそれを追い払って彼女と視線を合わせる。

そうしないと自分を保てなくなりそうで怖かったからだ。

「なんだい？」

「えっとね…好きな人とか…いる？」

思わぬ言葉に僕は固まってしまふ。

思い出すのは元の世界。

恋人は居なかったよ…幼馴染みないな子はいたけどね。…ただし女顔の男。

あいつが女だったらと何度神を罵倒したことか。

それぐらい可愛かった。

まあ、それは置いておいて…目の前のセレス嬢はじっと此方を見つめている。

その琥珀色の眼差しに僕は少し苦笑を浮かべて言った。

「残念ながら今のところは居ないね…。」

ちよっと…いやかなりの自嘲を含んだ笑みでセレス嬢から視線を逸らす。

ふん、どうせ僕は彼女居ない暦Ⅱ年齢ですよーだ。

「そ、そっか…それだったら…」

セレス嬢は何かを決意したように呟くと僕に向かって指を突き付け

た。

「わ、私が…マスターをメロメロにしてみせますっ!!」

こう、ビシィッ!と擬音が付きそうな勢いで突き付けられた指に僕は啞然とするしかなかった。

ちなみに離れたボックス席でこっちを見ていた4人は大爆笑。

ああ、そうか…これはきつと罰ゲームなんだろうなあ…。

なんかさっきからコソコソなにかしてたし、セレス嬢も恥ずかしいのか顔は真っ赤だし。

まあ、空気を読む男として僕はウザやかな笑みを浮かべて応える。

「ああ、楽しみにしているよ。」

言った途端背後の樽から物凄い黒いオーラが放たれた。

ちらりと視線を向けると先日出てきたあの剣である。

やはり呪いの剣だったか。

セレス嬢に視線を戻すと顔を真っ赤にさせたセレス嬢が「えっ? 嘘っ!?! ゆ、夢じゃないよね!?!」と何故かテンパって居る。

取り敢えずこのカオスな空間をどうにかしたい僕なのだった。

ちなみにこのカオス空間は学生たちが帰るまで続いた。

その後店仕舞いしていると目の前に先日見かけた黒髪の美女が現れて僕に掴み掛かり…

「この浮気者!!」

と涙目で僕を前後につくんがつくん揺らすのであった。

…あ、何かお腹から込み上げて…。

「ちよっ、それ以上揺ると…吐…うおえええっ!!」

「ぎにゃあああっ!!」

第12話 僕の休日って…（後書き）

主人公はもげてしまえばいいとおもうよ。

第13話 ニートと無邪気な恋心（前書き）

仕事が忙しくて書く暇がありませんでした。
申し訳ないorz

第13話 ニートと無邪気な恋心

夏も過ぎてようやくと涼しくなり始めた季節の変わり目にそいつはやって来た。

「やあ、店主、久しぶりだね。」

にこやかに挨拶をしながら入店するそいつに僕は苦笑を浮かべて言い返してやった。

「やあ、ニート…久しぶりと言っても昨日あったばかりなんだけどね？」

おや、そうかい？なんて言いながらそいつはにこにこ笑いながらカウンターに腰掛ける。

背中に生えた翼に物凄く鋭い鷹の目の様な眼差し、金糸の様に輝く金髪を腰まで伸ばしたその美貌に均整の取れたボディラインに数多の男が彼女に言い寄ったらしい。

しかしそんな彼女には思わぬ欠点があった。

「ところで店主、働かなくてもいい職場ってないかな？」

「黙れ、ニート。」

そう、彼女ははたらきたくないでござる！と公言するお馬鹿なのであった。

世の中には働きたくても働けない人が居るといふのにつ！と内心憤慨しながら彼女に注文された品を作り、出す。

「うん、相変わらずユウの作る料理は絶品だ…どうだい？私を養うという永久就職は？」

「断る。」

それは残念。とにこにここと笑いながらパスタをつつく彼女に僕は溜め息を吐いてフライパンを洗う事に専念する。

こう見えて目の前の彼女、名前はニートと言い、冒険者である。

翼人で、空中からの弓での狙撃を得意としており、こんな性格だが結構上のランクの冒険者なのだ。

しかし生来の性格からか本人の本質かわからないが彼女がその役割を果たす事はあまりない。

一人で迷宮に行く時は仕方なしにと单身潜り込んで当面の生活費を稼いで戻って来る事が多く、パーティを組んで行くと、その殆どを仲間に任せるという迷惑極まりない人なのである。

それでも腕は確かだからかそれともその美貌からか彼女を仲間にしたという冒険者は結構多い。

そんな彼女は目の前で「ああ、働きたくないなあ。」と呟きながらパスタを突いている。

暫く放って置くと彼女はブチブチと愚痴を呟くと何か思いついたのかポン、と手を叩くと此方に視線を向けて良い事思い付いたとばかりに僕の手をとる。

「どうだろうか？私を養うというとても楽しそうな職が…」

「黙れ、ニート。」

握られた手を振り払う僕に変わらず「おやおや。」と笑顔を浮かべると何事も無かったかのように再びパスタを突きだすのだった。

あの後何度も同じ様な遣り取りをして漸く彼女が帰った頃に新しい客がやって来た。

「やあ、店主、相変わらず客が無くて暇そうだね。」

何時ものように獰猛なドドラゴニアスの観点で見れば朗らかな一笑いみでやって来た彼の手にある物を見て僕は思わず其方に視線が行った。

それに気付いたのかラニ阿斯は僕にそれを手渡すと面倒臭そうに中身を語りだすのだった。

「ははは…知り合いの商人から押し付けられてね…仕方なく受け取ったんだが…」

彼にしては珍しく困った表情で頭を掻く姿に僕は自ずとその包みが気になってその包みを剥がそうと手を伸ばす。

「ああ、あまり迂闊に触れないほうがいいかもね…何しろ呪いの品らしいから。」

その言葉を聴いた瞬間、僕は慌てて手を引っ込めるとラニ阿斯に視線を向ける。

その表情はどこか疲れていて…新婚はやほやった頃のラニ阿斯を思い出させる。

あの時はラニ阿斯が窶^{やつ}れていて奥さんが矢鱈と艶々していたのが印

象的だった。

まあ、過去のことは良い：取り敢えず目の前にあるコレをどうするのかを考える事にする。

「残念ながら銀子さんは今は：」

「ああ、別に焦るものでもないからゆっくりで良いよ。」

呪いの品はこの間の件で十分だ。

こういう呪いの品の『処理』は基本的に銀子さん任せである。

よくこうやって呪いの品を力づくで解呪しているのを知っているのだろう。ラニアスは苦笑を浮かべつつカウンターに腰掛ける。

「ああ、それと娘が君に会いたがっていたよ。」

それは楽しそうに、しかしどこか寂しそうに話すラニアスに僕は苦笑で応える。

「：子供の成長は早いものでね：もう心は立派な淑女なんだろうね：どんどん男親から離れていくのさ。」

哀愁漂う彼の姿にただただ苦笑を浮かべるしかなかった。

「まあ、店主みたいな人なら僕も喜んで娘を嫁に行かせられるんだけどね。」

最後の言葉に僕は思わず手に持った布巾を投げ付けてしまった。

数日後、
ララちゃんが遊びに来た。

なんでもお母さんから『今日はお母さん達は一番好きな人と過ごすから貴女も一番好きな人と過ごしなさい。』と言われて来たらしい。

カレンダーを見ると今日はラニアス夫妻の結婚記念日であった。

ニコニコと無邪気な笑顔を浮かべて僕を見上げるララちゃんと何時着たのかニヤニヤと笑みを浮かべるアーベに僕は溜め息を吐くしかなかった。

第13話 ニートと無邪気な恋心（後書き）

ああ、働きたくないでござる！

でも働かないと生活が出来ないでござる！ o r z

第14話 オカマと猫娘、来襲。(前書き)

皆様、ご心配をお掛けして申し訳ありませんでした。

暫く事故の怪我の治療とPCの修理でデータが全て吹き飛んでおり
ました。

一応一段落着いたので更新します。

東北の地震、津波で亡くなられた方のご冥福をお祈り申し上げます。

第14話 オカマと猫娘、来襲。

カラン、とドアベルが静かな店内に響き渡る。

グラスを拭いていた僕はドアに視線を向けて…すぐさま視線を逸らした。

「い…いらっしやいませ…。」

何故目を逸らしたかって？それは…

「あらあ、ゆうちゃん…お久しぶりねえん♪」

筋骨隆々な大男が俗に言う女物のビキニアーマーで来店したからだ。

「きよ、今日は何にします…?」

クネクネとモデル歩きする大男に吐き気を堪えながら引き攣った営業スマイルで注文を取る。

彼(?)はカウンター席を陣取ると「そうねえん。」と呟き…

「うふっ、ゆ・う・ちゃ・ん・が・ほ・し・い♪」

「なあ、カマール…殴っていいかい？」

営業スマイルが般若に変わったのは言うまでも無かろう。

「もう、冗談なのに…でも激しいゆうちゃんも魅力的だわっ☆」

あれから僕の拳をひよいひよいと事も無げに避けるカマールに僕は諦めて彼がいつも頼むホットドッグを作り、カウンターに置く。

それを口に入れながら僕を茶化すカマールに少し息の切れた僕は落ち着こうと水を一口含み…

「そういえばアーベは来てるのかしら？」

ふとカマールが口にした人物に思わず水を吐き出しそうになった。

「ゴホッ、ゲホッ！」

「あらあら、慌てすぎよ？」

思わず咽る僕にカマールは優しく背中を擦ってくれる。

：基本的に良い奴で、個人的には好感が持てる奴なのである。

「早く愛しの彼に会いたいわぁ…」

これがなければなのだが。

そう、コイツはバイセクシャルなのである。

因みにロックオンされたのはアーベである。

本人に聴いてみた所：何やら運命的なモノを感じた。とか。

その後の僕を舐める様な目で見て来なかったら心から安心出来たけどねっ！！

結局5時間程してからカマールは帰っていった。

時たまやってくる冒険者に向かって「ウホッ、イイお・と・こ♪」
とか言った時は思わずお盆を投げてしまった。

ちなみに彼が食った冒険者は暫く冒険者稼業が出来ないほどの男性
不振に陥るらしい。

何故とは聞かない：恐らく牡丹の花が落ちる光景と悲鳴を連想すれば判ると思う。

まあ、取り敢えず悪魔は去った。

僕は気を取り直してグラスを拭く作業に戻ろうとして：

「あやややあー!!」

ドンガラガッシャンと大きな物音と共に店の椅子や机を巻き込み来店してきた少女に溜め息を吐いた。

「はい！こんにちわー！こんばんわー！」

異様に高いテンションに向日葵の様に爽やかな笑顔：少し外に跳ねた肩ほどの赤髪に左頬にある一文字の切り傷。

少し釣り目なその青目を細めて本人曰くチャームポイントな八重歯を見せながら元氣良く片腕を伸ばして立ち上がる獣人の少女は何事

も無かった様にカウンター席に着くとバンバンと机を叩いて僕を見上げる。

「マスター！カミユをくれ！！」

「酒なら酒場に行け。」

少女の言葉に僕はそっけなく返すとううむ…。と唸りだす少女。

すると次は何を思い付いたか…

「ならマスター！ミルクを！！」

「…ほら。」

「わぁーい！！」

返って来るであろう言葉が返って来たので彼女用に少し温めのミルクを差し出す。

それをゴクゴクと一気に飲み干した彼女はぷはぁ、と少女らしからぬ動作でカップを机に置くと尻尾をフリフリ…

「マスター！もう一杯！！」

「…はいはい。」

次を催促するのだった。

目の前で上機嫌に焼き魚を突いている少女は最近この店にやって来たのである。

初めは猫被っていたのかとても大人しそうな子だったのに仮面が剥がれたと思ったらこんな感じで来るようになった。

そんな事をぼんやり考えながらグラスを拭いていると…

「ういゝつす。」

何時もの様にやる気の欠片も無い声でアーベがやってきた。

「マスター、何時ものゝ。」

アーベは何時も通りカウンター席に腰掛けると何時もの様に注文をする。

「はいはい。」

こっちも慣れたもので何時もアーベが注文するエールにつまみをいそいそと用意する。

まあ、何時もツケで払うわけなのだが…

ふとアーベの隣に座っている少女に目線を送る。

彼女はアーベが来た途端にしおらしくなり…チラチラとアーベをチラ見しているではないか。

アーベはそんな彼女に気付かず…

「今日はホントに疲れたよう…パーティの奴ら、新人に何期待してんだか知らないけどよお…。」

と愚痴を零しながらチビチビとエールを飲んでいる。

僕は黙ってグラスを拭きながら適当にアーベの相手をしていると、アーベは言いたい事は言い切ったのか深い溜め息を吐いて…

「ああ、ごめんねマスター…何時も愚痴っちゃって…で話は変わるけど…」

「ああ、はいはい…次はちゃんと払ってね。」

「さっすがマスター！分かってるう〜♪」

鼻歌を歌わん勢いでそのまま退店するアーベ、慣れた僕もつい適当に流したがこれは何時も通りツケでお願いと言う事だ。

ふとアーベが去った後少女を見ると…矢鱈と興奮した表情でアーベが口に使っていた食器を舐めていた。

「はあ…はあ…アーベ様あ…」

もうそれは発情期真盛りの猫の如く。

頬を紅潮させてうっとりとした表情でアーベが座っていた座席にスリスリと頬ずりをする始末。

僕は取り敢えず彼女の唾液でベトベトな食器を水を張った盥に付けて万能消毒液を放り込むのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9796/>

異世界喫茶物語

2011年9月25日09時35分発行